

「乙姫さんが浦島に会いにきた」

増山雄三

私が日課にしている、昼の散歩道の旧新名道路の脇道から少し入ったところに、小さな「龍宮城」と「乙姫神社」があるが、須磨の海岸からかなり離れた内陸に、どうしてそんなものがあるのか、不思議に思っていた。

そこで、この地の風土記を調べてみると、それは、鎌倉時代以降、寺院参詣旅行が流行し、沢山の参詣者を集めるために、幕府が各地に様々な名所を創作し、江戸時代になり、明石藩主だった松平忠国がこれに目をつけ、「下畑乙姫神社」を創り沢山の参詣者を集めて、近くには「鯛釣神社」まで創った。

いまは、高速道路の橋脚の下に隠れてしまっているが、「浦島太郎」が、その上で玉手箱を開き白い煙が出たという、ご神体の岩や祠等を見ると、成程、うまく創作したものだ

と感心させられる。

実際、私がここを訪れた時には、まさに、海底の竜宮城へやってきたような錯覚をした程だから、当時、参詣する人達は、龍宮城と乙姫神社を拝み、臨場体験できればそれでよかったので、海沿いで無いこんなところに、乙姫神社があっても良い理由が分った。

それで、助けた亀に連れられ、龍宮城に向かったという「浦島太郎」の伝説は、木曾川の「寝覚めの床」にもあるが、一体どこが発祥のルーツなのか調べると、それは、全国各地に分布し、遺跡と称するものもある。

例えば、丹後城崎北の海岸にある「網野神社」は、まわりは砂丘に囲まれ、「浦島大明神」を祭神にし、付近には浦島太郎が住んでいたという家の跡や、その墓と言われる、石棺の露出した古墳まであり、いかにもそれらしい道具立てが、あちこちに揃っている。

かたや、日本書紀の雄略天皇期には、実在した人物の「浦嶋子」として登場するが、丹

後半島の先端にある、京都府伊根町は、その物語を伝える地で、その「伊根の舟屋」から、車で三十分ほどいくと本庄浜へ出るが、そこは、ブロックに白い波が砕け、その先には嶋子が舟を繋いだという岩が見え、鈍色の日本海の合間に、ひよっとしたら竜宮城がないかと目を凝らしたが、垂れこめた雲に遮られ、うまくイメージできない。

それで、浜に注ぐ筒川に沿い約二キほど遡っていくと、そこに、嶋子を祭神とする「浦嶋神社」があり、そこには、一二九四年の書写とされる「続浦嶋子伝記」や、物語を描いた絵巻の「浦嶋明神縁起」があり、それらはいずれも、十四世紀後半には国重要文化財になっ
ていて、それにあわせ、室町時代に作られた「玉手箱」も所蔵している。

そして、神社の資料室にある、床の間にかかっている掛幅形式の、これも室町時代に画かれた絵巻を前に、宮司である宮嶋淑久さんが、次のように語り始めた。

「神社があるあたりの、山のふもとから小舟で釣りに出た『浦嶋子』。釣り上げた五色の大亀が乙女（亀姫、または神女）に姿を変え、二人は常世の国へいく。そしえ夫婦となつて暮らす、三年たつて嶋子は故郷を思い出す。神女から玉手箱が手渡され「開けてはならない」と送りだされた嶋子は、筒川で出会った老女に、「嶋子という人は、三百年前に海の彼方行ってしまったまま、帰ってこなかった」と聞かされる。それで、嶋子が神女への思いを募らせ、開けてはならない玉手箱を開けると、紫の煙がたなびき、それを追ううちに、嶋子は白髪の老人になつてしまい、そしてすぐ亡くなつた」と話すが、この話の内容は、何とも現実離れした、ロマンのある面白い話ではなからうか。

実は、この話は人神交婚説話の一つで、仙境に長期間逗留して、歓楽生活を続けるといふ、中国の「桃源郷説話」をルーツにし、助けた亀は「亀比売（かめひめ）」で、その女

と交婚するといふのも、山奥の仙境を、海の
竜宮城と言ひ換えただけだといふ。
また、三年の滞在が三百年だつたといふの
は、儂い人生を寓意しているといふよりも、
浦島がその意思に反して竜宮城に抑留されて
いたのだと、民話研究者は説明するが、最後
は、紫の煙で老い果てる悲劇になっているの
も、あるいはそれを暗示しているのだろう。
似て非なるものかも知れないが、こんな話
を聞くと、今なお解決しない、北朝鮮の拉致
問題を思うが、願う事なら、双方の協議によ
る玉手箱から出るのは、紫の煙でなく、「家
族との再開」といふ、ハッピーエンドであつ
て欲しいものだ。
ちなみに、日本書紀によると、嶋子が蓬萊
山へ旅立つたのは四七三年で、また、十二世
紀にできた「水鏡」では、故郷へ帰つてきた
のは八二五年とあり、これを耳にした第五十
三代淳和天皇が、この年に浦嶋神社の建立を
命じたとされている。

絵巻には、常世の国で嶋子が修業を積んだ
険しい山や、不老長寿の薬が入った壺が描か
れているのを、宮嶋さんは「物語には、中国
の神仙思想の影響が見られます」といって、
その意味を解説してくれた。
宮嶋さんは、代々宮司を務める家に生まれ
て、祖父や父が参拝客に語る嶋子の物語を、
横で聞いて育ったので、そのまま伝えていく
のが、自分の役割ではないかと思い、地域の
人には当然ながら、ここを参拝するため訪れ
る人達にも、それを伝える事に行っている。
さらに宮嶋さんは、「かつては、沖の定置
網に、アオウミガメやアカウミガメが、しょ
っちゅうかかった。漁師たちは『乙姫さんが
浦島に会いに来た』といって、大八車で神社
に運んで祈禱してもらい、酒を飲ませて海に
返した」という話もしてくれた。
この神社は、創建千二百年になる二〇二五
年に、本殿の大改修を予定しているが、千三
百年ほど前に物語が成立してから、「浦島太

郎」は人々の記憶という舟に、長い間にわた
り乗り続けているが、亀に乗り始めたのは十
八世紀初期のころからだ、浦島太郎を研究
している、日本史専門の大学の先生はいう。
そして、長い尻尾を持つ「蓑亀」の絵や飾
り物が、神聖かつお目出度いものとして、全
国的に流行した事を背景に、からくり興行で
は、浦島が亀に乗り竜宮城へ行く演出があっ
た事で、イメージが定着していったという。
浦島太郎の物語は、中国にも仏教の浸透を
反映して、「助けた亀の恩返し」という要素
が加わったり、さらに、時代が下って亀と乙
姫が分離したりと形を変えていき、全国各地
でも、様々なバリエーションの伝承がある。
先に話した大学の先生は、「和歌や能それ
に狂言とか御伽草子など、新たなメディアと
触れ合う度に変化していく。だから、どの時
代どの場所の浦島も本物で、勿論、これか
らも変化していくのでしよう」と話す。

令和二年十二月